テイルズオブエクシリア～心をなくした少女～

ジャックポット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア〜心をなくした少女〜

【Nコード】

N1850X

【作者名】

ジャックポット

【あらすじ】

幼い頃の出来事が原因で感情を失ってしまった1人の少女。様々な経験の果てに再び心を取り戻すことができるのか…

これは、失った心を取り戻すために、変わろうと前へ進んでいく少女の物語である

テイルズオブエクシリア二次創作です。

オリ主転生ものではありません。

原作キャラの様子、口調が崩壊してます。

リオの額の汗を拭いながら、辛そうな顔でリオを見る

リオ「心配しなくても大丈夫ですよ。それに、もう昔の話です。」

プレザ「だけど」

プレザの言葉を遮ってリオが尋ねる

リオ「それにしても、なぜ私が辛そうな顔してると思っているのですか？私に心はありませんから表情はかわらないのですが」

首を傾げ、プレザに聞く

プレザ「ふふ、もう6年も一緒にいるんだもの、その位わかるわよ。でも、自分のことを悪く言うのはやめなさい、リオにもちゃんとはあるんだから。それと、敬語もね。」

リオ「わかり…んん、わかったよプレザ姉さん。これでいい？」

リオの様子に微笑みながら頷くプレザ

プレザ「それに、分かるのは私だけじゃないわよ？ウィンガルと陛下も表情の違いを理解してるわ。ジャオは少しわかり始めたくらいで、アグリアは…まあ、あの子はあんな性格だし、全く気にしてないみたい。でも、心配はしてるみたいね。」

その言葉に少し驚いた様子のリオ…無表情のままだが…

それからしばらくの間2人で話していた

プレザ「さ、もう寝なさい。眠るまで側にいてあげるから」

と、近くの椅子に腰掛けるプレザ

リオ「うん、おやすみなさいプレザ姉さん」

そう言っつてベッドに潜り込むリオ

それから、完全にリオが寝付くまでプレザは本を読んでいた。そして、すやすやと眠るリオを見ながら

プレザ「この子がここに来てもう6年か…少しずつでも感情が戻ってくればいいのだけど…」

プレザの悲しそうな呟きは誰にも聞こえず、闇に消えていった…

設定

名前：リオ・ミストラル

性別：女

年齢：17

身長：155cm

体重：秘密です

容姿：綺麗6可愛い4の超美人
腰あたりまである長い黒髪、スカイブルーの瞳、まるでお人形さんのように見える

武器：剣と短剣の二刀流

好きなもの：今の家族、静かなところ、黒い服

嫌いなもの：明るい服、うるさい人・ところ

備考：11歳の時にジャオに助けられて、そのままほぼ強制的に力
ン・バルクに住まわされている。最近は満更でもない様子
過去が原因で男性恐怖症になっている。信用すれば多少は大丈夫
喜怒哀楽、表情はないが、行動は普通の少女

設定（後書き）

大体はTODのリオンですが、流石に容姿は変えました。容姿までリオンだと……ね、あれですから。

カン・バルク城謁見の間

そこには、台座に座る赤と黒の鎧に身を包んだ男　ガイアスと、その側に立つ黒衣の男　ウインガル、そしてその二人に向かい合うようにして立つ、一人の人形のような少女　リオがいた

ウインガル「昨日は大丈夫だったか？叫び声が聞こえたから心配したぞ」

ガイアス「不安があるようなら遠慮せずに言え、ジャオもアグリアも気にしていたからな」

二人はリオにそう話しかける

リオ「大丈夫だ…ですよ。プレザ姉さんがすぐに来てくれましたし、眠るまで側に居てくれたみたいですから。心配してくれて有り難うございます」

リオは二人にお礼を言い、頭を下げる

ガイアス「ふっ、そう畏まる必要はない。今は我々しか居らんのだからな」

ウインガル「陛下の仰る通りだ。陛下と我等の前で敬語はやめて貰いたいな」

リオ「なるべく気をつけま…るよ　と、それよりも他の皆は？姿が見えないけど」

ほかの3人が居ないことが気になり、そう尋ねる

ウインガル「皆はそれぞれ別の仕事について貰っている。長期の任務だから、暫くは戻らないな」

リオ「そうなんだ、プレザ姉さんにお礼を言いたかったんだけどな…」

ガイアス「そのようなことを気にする必要はない。家族なのだから当然のことをしたただけだ、我等はそう思っている」

リオ「ありがとう。ガイアスさん、ウインガル兄さん」

警備の兵が来るまでの間、3人で話していた

リオ「と、それでは失礼します。私はこれから教会に行きますので」

そう言っつて、一礼して謁見の間から出て行った

リオが出て行ったあと

ガイアス「少しずつではあるが、我等を信用してくれているようだな」

ウインガル「そのようですね。最初の頃は必要最低限しか話しませ

んでしたから、大分慣れたのでしょ」

ガイアス「ああ、我がア・ジュールの民を守るのが、王としての責任であり義務だからな　だが、同じア・ジュールの民とはいえ、あの非道な行いは王として捨ておけん」

ウインガル「はい。おそらく元々特別な力の持ち主であり、あの容姿ですから標的にされたのでしょ」

ガイアス「だからこそ、我等が守ってやるのだ。我がアジュールの民として　そして、家族としてな」

ウインガル「はっ！」

ザイラの森の教会

「ふう、ここは静かでいいな　それにしても、皆私のことを気にしてくれてるんだ…こんな私なんかの事を」

そう言っただけで彼女は右腕の袖を少しまくり、持っていた短剣で自らの腕を浅く傷つけた

すると、傷ついたところが光り、腕にあった傷がすぐに治っていき、流れた血を拭くと、

先程の傷はきれいに消えていた

傷が消えたのを確認して目を瞑り集中する

そして、目を開けると…リオの周りに光の玉のようなもの

微精

霊がいくつか漂っていた

すると、微精霊が話しかけてきた

『あんまり、自分を傷つけない方がいいよー』

『傷を治すのもマナを使うんだから』

『それに、リオが傷つくところは見たくないしねー』

『『そうそう』』

「わかったわ、ごめんなさいね」

リオは微精霊達に謝った

そう　　リオは精霊が見え、会話することが出来る、唯一の人間だった

リオは再び目を閉じて、何かを考えているようだ

（こんな力があるから、あんな事になった……けど、そのおかげで私は今まで戦ってこれた。兄さんや姉さんのおかげで強くもなれた気がする　だから…私も変わらなきゃ、こんな私を心配してくれる家族のために、今度こそ家族を守るために、私の前ではもう誰も死なせないために……私は、もっと強くなる！）

心をなくした少女に、ほんの少し心が戻った瞬間だった

2 (後書き)

ジャオに助けられた理由、リオの特別な力が明らかに。

リオは、ちよくちよく森で魔物と戦ったり、四象刃やガイアスに鍛えられています。

リオへの非道な行いについては後々語る時がくるでしょう。

リオの決意から2週間後：カン・バルク城謁見の間

そこには、報告に戻ってきていた四象刃とガイアス、そして初めて見せる真剣な瞳をしたリオがいた

ウィンガル「どうした？いつになく真剣ではないか」

リオ「……今日はお願いがあつて来ました」

ガイアス「願い？なんだ、言ってみろ」

リオ「はい……しばらく旅にでてみたいのです」

ガイアス「暫く旅にでたい…と？」

リオ「はい」

ジャオ「何故じゃ、生活に不満があつた訳ではないじゃろっ？」

リオ「はい、不満なんてありません」

アグリア「なら、必要ないだろ！！何考えてんだよ！？」

ブレザ「まあ、抑えてアグリア。…それで、旅にでたいと思つた理由を聞いてもいいかしら？」

リオ「……この6年、私はいつも兄さんや姉さんに守って貰つてき

ました。皆が私を心配してくれているのは知っていますし、ここの生活も好き…なのだと思います。でも、だからこそ私は心を取り戻したいと思いました。皆と一緒に笑っていたい…心から皆のことが大好きだと伝えたい。旅をすれば可能になるのでは…とそれに、男性恐怖症を治さないととも思いますし」

ジャオ「旅をして、様々な経験をすれば心を取り戻せるやもしれぬ…か？」

リオ「はい」

アグリア「だからって」

ガイアス「構わぬ、行ってくるがいい」

「…陛下!？」

リオ「ガイアスさん…」

ガイアス「ふつ、リオがそこまでの意志を持って決めたのだ、ならば我は止めはせぬ。それに、色々準備していたようだしな」

リオ「!?!?…気付いていたのですか？」

ガイアス「当然だ。決意したのは約2週間前…お前が叫び声をあげて目を覚ました翌日。我等と話した後、教会で決めたのだろうか？」

リオ「っ!?!?…そこまで…」

ガイアス「我だけではない、ウインガルも気付いていたぞ」

リオは少し驚きウインガルを見る

ウインガル「陛下の仰る通りだ。いつもと表情が違っていたし、何かの準備をしているのは知っていた。だから俺も止めはしない、行ってこい」リオ「ありがとうございます、ガイアスさん、ウインガル兄さん」

プレザ「はあ…、陛下がそう仰るのなら、止められないわね。気を付けて行ってきなさい」

ジャオ「僕にも止められんのだ。強くなって戻ってくるのだぞ」

リオ「ありがとう、ジャオおじさん、プレザ姉さん」

2人にお礼を言って、上目づかいでアグリアを見つめる

「アグリア姉さん…」

アグリア「うぐっ、……あ〜もう、わかったよ！とめねえよ！！行ってこい！！」

リオ「ありがとう、アグリア姉さん」

アグリア「ふ、ふんっ…ぜってー帰ってこいよ」ボソッ

そっぽを向きつつそう呟く

ウインガル「それで、いつ頃発つつもりだ？」

リオ「許可ができればすぐにも行くつもりでした」

ガイアス「そうか、気をつけるのだぞ」

リオ「はい、行ってきます」

皆に挨拶をして、謁見の間をあとにした

カン・バルク城城門

「さて、どこから行きましょうか」
地図を見ながら少し考えるリオ

「とりあえず、モン高原を抜けて、シャン・ドウを目指しまし
よう」

そう決めて、静かに歩き出した

少女の心を取り戻すためにの旅が、今始まった…

3 (後書き)

アグリアがツンデレにWWW

男性恐怖症について

男性陣はほんの少し怖いかな…っていつくらい。

最初の頃は会話も苦手なくらいでした。

モン高原

カン・バルクを出発してから1時間ほど…現在、リオの前には数体の魔物がいた

「やっぱり簡単には進めませんか…あれ？」

ふと自分のコートを見ると、ポケットの中が光っているのに気づいた

「これは…リアルオーブ？どうして、私持ってなかったのに」

ポケットを探ると、リアルオーブと一枚の紙が出てきた。その紙には

「いくら俺たちが鍛えたとはいえ、オーブ無しでは辛いはずだ。だからお前にくれてやる。それに…強くなるのだろう？なら、納得するまで鍛え上げる。強くなったお前と再び会うのを楽しみにしている」

「これはウインガル兄さんかな？…ありがとう」

手紙を読んで、リオは心の奥に何かを感じた

「では、私の旅の初戦闘といきましょうか」

手紙をポケットにしまい、武器を構えた

すると、魔物が襲いかかってきた

「やああっ！はあっ！」

剣と短剣、二つのリーチの違う武器を巧みに使い、斬撃を繰り返していく

「魔神剣！」

飛ぶ斬撃が魔物へ向かい、魔物を倒した

「次は、魔神剣・双牙！」

連続で放たれる魔神剣が更に魔物を倒していく

「これで最後です！幻影刃！幻影回帰！」

凄早い早さで通り抜ける際に斬撃を浴びせ、もう一度、敵の背後から同じ速度で斬りつけた

「ふう、まあまあですね。…さて、先に進みましょうか」
魔物を倒し、シャン・ドウを指し歩を進める

その後、何度か戦闘を繰り返しながら進んでいく

シャン・ドウ

「やっと着きましたね…ここがシャン・ドウですか、やはりカン・バルクとは違いますね…」

岩壁に彫られている像を見ながら散策していく

ザワザワザワザワ

「お、おい見てみるよ」

「ああ、超美人じゃん」

「あの人凄く綺麗」

「え、綺麗より可愛いだよ」

「誰か声かけてみるよ」

「無理だろ。絶対相手にされねえよ」

ザワザワザワザワ

リオ「…??（何でしょうか、視線を感じる気がします）」

周りの視線を気にしながらも橋の上で休んでいると

「あんたも空中闘技場へ観戦に来たのかい？」

近くにいたおばさんに話しかけられた

リオ「空中闘技場？」

「そうさ。ほら、あそこに見えるだろ？あれが空中闘技場だよ。ま

「だ少し先だけど、闘技大会があるからね、見に行ってみたらどうだい？」

リオ「（どうしましょう。少し参加してみたい…かも）…そうですね、ありがとうございます。じゃあ行ってみますね」

おばさんにお礼を言って闘技場に向かう

空中闘技場

リオ「ここが闘技場ですか、とりあえず受付の人に聞いてみましょう」

リオ「あの…」

「伝統と血と汗と涙と絶叫が支配するシャン・ドウ闘技場へようこそー！御用は何でしょう？観戦ですかー？」

リオ「いえ、参加をしてみたいのですが」

「えっ？…んん、失礼しました。参加申し込みですね、喜んでー！命知らず入りましたー！」

「参加されるのはシングル戦でよろしいですかー？」

リオ「はい」

「参加ステージ、かしこまりましたー。本当にいいですか？思い残

すことがあるとツライですよー?」

リオ「大丈夫です」

「支給されるアイテムはこちらです。人生との餞別にならないよう、お気をつけてー!」

「それでは、いざ戦いの宴へー!いってらっしゃいませー!」

こうして、リオの闘技場初デビュー戦が始まった!!

4 (後書き)

初戦闘！

そしてウインガルがニクい事をしました。

シャン・ドウにて

リオは自分の容姿を全く気にしていません。なので、視線を集める理由がわかってません(笑)

闘技場

「やあっ!」「ふっ!」「はあっ!」

持ち前のスピードを生かして、敵を翻弄しつつ倒していく

「空襲剣!」「臥竜閃!」「臥竜滅破!」

移動しつつ空中へ切り上げ、そこから2度の下への斬撃を繰り返して敵を倒す

「くっ、流石に数が多いですね…なら!」タタッ

バックステップで距離をあける、そして

「大気よ、敵を滅する力となれ!エアプレッシャー!」

一定範囲の敵を精霊術で押し潰していく

「まだいますか…それなら」

「これで終わりにしましょう」

「深淵の間、果てなき大地、「敵を葬る冥府の槍!」「敵を貫く地龍の牙!」「デモンズランス!」「グランドダッシュャー!」」

ドガガガガガガ!!!

二つの精霊術が同時に発動し、上からは闇の槍が、下からは土の槍が同時に襲いかかり敵を貫き葬り去っていく

「っ、はあっ、はあっ、はあっ」

「さ、流石に二重詠唱は辛いですね…でも、これで」

ワアアアアア！！

「決まったー！！信じられません！！リオ選手、その容姿からは考えられないスピードと剣術、そして精霊術で見事に勝ち抜きましたー！！！！」

リオ「ふう、満足です。さて、インタビューは苦手ですから宿に戻りましょう。騒がしいのは嫌いですし」

美しい女性が勝ち抜いたという事で、会場全体が大歓声の中闘技場をあとにした

シャン・ドウ宿屋

「次はどこへ向かいますしょうか」

地図を見ながら考える

「ソグド湿原の方に行くか、ラコルム街道の方に行くか…んー」

・
・
・
・
・

「よし、ラコルム海停を目指しましょう」

道具屋に必要なアイテムを揃え、シャン・ドウをあとにした

ラコルム海停

リオ「結局、ラコルムの主とやらは出てきませんでしたね…戦わなくてすみましたが」
奇跡的にラコルムの主と遭遇せずに済んだリオ　まあ、他の魔物とは戦っていたが…

「さて、船の時間でも見てきましょう」

船着き場へと向かい、時間を確認する

リオ「あの、船の出発時間が知りたいのですが」

「ああ、サマンガン海行きは30分後、イラート海行きは1時間後、ル・ロンド海行きは2時間後だよ」

リオ「そ、そうですね、ありがとうございます。…で、ではサマンガン海行きを一枚下さい」

「わかりました。はい、どうぞ」

リオ「あ、ありがとうございます」

チケットを受け取り宿屋へ向かうリオ

リオ「（やっぱりまだ怖いですね…手の震えが収まりません）」カ
タカタ

「（少しずつでも治していかないと、この先苦労しそうです）」

30分後サマンガン海停行きの船上

リオ「これが海ですか、初めて見ましたね（…あの時は、目が覚め
たらカン・バルクのお城にいましたからね…）」
それにしても、綺麗ですね…（これが“感動”というものなのでし
ょうか）」

「（一体何なのでしょうか…また妙に視線を感じる気がしますが、
まあいいでしょう）」

その後、リオはサマンガン海停に到着するまでずっと海を眺めてい
た

ザワザワ

「美しい」

「一枚の絵画を見ているようだ」

「あの絵は壊しちゃいけないよな」

ザワザワ

周りの視線を集めながら（笑）

5 (後書き)

リオは戦闘中性格が変わります。∴というより、気持ちが高ぶっている感じです。

やっぱり戦闘描写は難しい!!
駄文になってないか心配です

二重詠唱について
リオのスキルです。普段から精霊と会話をしているので、精霊術に
関しては多少の無茶を聞いて貰っています。なので、消費TPX1・
2倍で発動できます。 参考：BLEACHの鬼道より

使用するのは闘技場や強敵、敵の数がマジで多い場合だけです。
普段は使いません!

サマンガン海停

リオ「着きましたか…船の旅も悪くありませんでしたね」

「ここからだ…次の目的地はカラハ・シャルルですね。よし、行きましよう」

リオはカラハ・シャルルへ向けてある来だしたが…

「そこのお嬢さん、ちいとじじいの話に付き合ってくれんか？」

リオ「話…ですか？いえ、残念ですけど…」

「聞いておいた方がいいぞ？命に関わることじゃからな」

リオ「……分かりました。お聞かせ願えますか？」

リオの言葉を聞き、おじいさんは語り始めた

要約すると

約20年前、トリルという青年が自分の持つ特別な力を使い、戦えば戦う程強くなる7体の魔物を造り出した
しかし、トリルは突然発生した大津波に飲まれ命を落とす
トリルは亡くなったが、7体の魔物は今も世界中のどこかで生きて
いるらしい

その魔物は体の一部に武器を生やし魔装獣と呼ばれるようになった

「よいか？体に武器を生やした魔物と会っても絶対に戦ってはならんぞ？」

リオ「…ありがとうございます。気をつけますね」

おじいさんにお礼を言って、カラハ・シャルルを目指した。

サマンガン街道

リオ「あれは…検問？何かあったのでしょうか」

疑問に思いながらも、そのまま進んでいく

「止まれ！」

「荷物の中を見せて貰おう」

リオ「ど、どうぞ」

検問の兵士に荷物を渡す

「ここで何をしている」

リオ「こ、これからカラハ・シャルルへむかうところです。…あの、何かあったのでしょうか？」

「お前に話す必要はない！」

リオ「ご、ごめんなさい…（こ、怖いです）」「ビクッ

男性が苦手の上、凄い剣幕で言われた為、涙目になるリオ

すると、もう一人の兵士が

「（か、可愛い…）んん、済まないな。我が軍の研究施設から重要なものが盗まれてな。その犯罪者を追っているのだ…荷物の検査も終わったようだ。ほら、通っていいぞ」

リオ「あ、ありがとうございます。が、頑張ってくださいね」

話してくれた兵士にお礼を言い検問を通り過ぎた

しばらく歩いていると、突如数体の魔物が飛び出してきた

リオ「くっ、いきなりですね…それに、囲まれてしまいましたか」

どうやって倒していこうか考えていると…

ドンッ！バキッ！

????「危ない！？大丈夫ですか!?!」

後ろから襲いかかろうとしたらしき魔物を殴り飛ばし、黒髪の青年が話しかけてきた

リオ「え、ええ。ありがとうございます」

黒髪の青年に返事をする…と、後ろの方から数人が駆け寄ってきた

??「まったく、相変わらず君はお節介だな」

??「まあまあ、そこが優等生の良いところじゃない」

??「です」

??「ジュード君は優しいからねー」

黒髪の青年 ジュード という名らしい に話しかける金髪の綺麗な女性と背の高いおじさん?と妙なぬいぐるみを抱く少女がいた…
…というか、今、ぬいぐるみがしゃべってなかった!?

リオがプチパニックに陥っていると、急に背の高いおじさん?が銃を構え

カチャッ バン!

おじさん?「今は話している場合じゃないんじゃないの?」

リオ「はっ! そうだ、まずは魔物を倒さないと」

金髪「ふむ、そうだな。話は魔物を倒してからだ」

ジュード?「よし! いくよ、みんな!」

「了解した(はいよ)(はい!)(わかった)」「」

こうして、ジュード達との共闘が始まった

ジュー「はあっ！三散華！」「連牙弾！」

拳と蹴りの連続攻撃で魔物を倒していく

金髪「行くぞ！アサルトダンス！」「ライトニング！」

流麗な剣戟で攻撃した後、魔物に電撃を浴びせる……今、詠唱して
なかったよね……

おじさん？「タイドバレット！」「瞬迅剣・砲牙！」

足元へ銃撃を放ち、瞬速の突きを繰り出した後、砲撃で止めを刺した

少女「今治します！快方の光よ此処に！ハートレスサークル」「深淵の闇よ来たれ！ネガティブゲイト！」

傷ついた仲間を癒しの光で治療し、闇の力で魔物を異空間へ引きずり込む

リオ「皆さん、強いですね……私も負けてはいられません」

リオ「聖なる光、降り注ぐは数多の剣！プリズムフラッシュャー！」

「深淵の闇、敵を引き裂く冥府の宝珠！イービルスフィア！」

光の剣が降り注ぎ、闇の塊が魔物を切り裂いていく

戦闘終了

リオ「あ、ありがとうございます。助かりました」

ジュード「いいよ、気にしないで。僕が勝手にしたことだから」

リオ「ですが」

おじさん? 「そうそう、気にしない気にしない。ジュード君はこういう性格だから」

ジュードの肩に手を回しながら話しかけてきた

リオ「え、えと…」
サッ

一歩後ろに下がりがりながら少し困惑する

おじさん? 「ありゃ、なんか警戒されてる?」

ぬいぐるみ? 「アルヴィン君は軟派だからねー。わかつちやうんだよ、きつと」

少女「そうですよ」

おじさん? 「つつせ」

ぬいぐるみに文句を言いつつ後ろに下がる

金髪「済まないな。それよりも、此処で何をしている？」

リオ「あ、いえ。カラハ・シャルルへ向かうところで魔物に襲われました」

ジュード「そうなんだ。僕達もカラハ・シャルルへ向かうんだけど、よかったら一緒に行かない？仲間は多い方がいいでしょ？」

そういつて後ろの3人を見る

金髪「はあ…本当にお節介だな、君は。…私は構わない、好きにするが良い」

少女「私もです」

ぬいぐるみ「ぼくもいいよー」

おじさん？「俺も別に良いぜ」

ジュード「だってさ、どうする？」

3人の言葉に少し考える

リオ「(どっ)ごうしましょう…少しでも色んな人と関わった方がいいですよね(…)…ご迷惑でなければ、お願いしてもよろしいですか？」

ジュード「うん、勿論だよ！よろしくね」

リオ「よ、よろしくお願ひします」

リオがパーティーに加わりました

ジュード「とりあえず、自己紹介しようか。僕はジュード、ジュード・マティス」

リオ「申し遅れました、リオと申します」

ミラ「私はミラだ。これからよろしく頼む」

アルヴィン「俺はアルヴィン、傭兵だ。よろしく頼むな、お嬢ちゃん」
エリーゼ「エリーゼ・ルタスです。よろしく願いします、リオさん」

ティポ「僕はティポだよー」

リオ「ぬ、ぬいぐるみが喋ってます…」

エリーゼ「ぬいぐるみじゃないです、ティポはティポです。私の家族です！」

リオ「そうなの、…ごめんなさいね。よろしく願いしますね、ティポさん」

ティポ「うん！よろしくー」

自己紹介を済ませ、カラハ・シャルルへ向かう

アル「それにしても、お嬢ちゃん結構強いんだな」

リオ「へ？そ、そうですか？」

アル「結構強力な精霊術だったしな、期待してるぜ？」ガバツ

ジュードにしたように、肩に手を回す

リオ「っ！！？」

その瞬間、過去の出来事がフラッシュバックする

リオ「あ、あ、…い、いや、いやあああっ！？」

悲鳴を上げ、頭を抱えその場につづくまるリオ

アル「お、おい！？」

「大丈夫（か）ですか（）！？」

リオ「いやあ、…来ないで！もう許してえ！！」

アル「おい！落ち着けて！」

ジュード「アルヴィン！！少し離れて！」

ジュードに言われ、距離をとる

アル「どういふ事だよ、これは」

ジュード「多分…過去に何かトラウマがあるんだよ。それがさっきの行動で起きてしまった…エリーゼ、お願いがあるんだけど」「エリーゼ「はい、何ですか？」

ジュードに説明を受け、リオの元に歩いていく

エリーゼ「リオさん、リオさん！」

リオ「え…エリー…ゼ？」

リオが顔を上げた　するとエリーゼは

ギュッ　優しくリオを抱きしめた

エリーゼ「大丈夫、もう大丈夫ですよ」

その行動にリオは少しずつ落ち着きを取り戻していく　そして

リオ「ありがとう。ごめんなさいね、エリーゼ」

エリーゼ「いえ、気にしないでください。　じゃあ皆さんのところに帰りましょう」

リオ「う、うん…あの、エリーゼ？…その、て、手をつないでも、いい？」

エリーゼ「はい！」エリーゼは頼られていることに嬉しくなり、リオと手をつないで皆のところへ戻った

リオ「先ほどはごめんなさい、取り乱してしまっ…」

アル「いや、俺の方こそ悪かった。嫌なこと思い出させちゃったみたいだしな」

リオ「いえ、アルヴィンさんのせいではありません。…私、その…昔のことで男性が苦手なんです。治さなければとは思っているのですが…本当にごめんなさい」

アル「リオが謝ることじゃないよ。治したいなら少しずつ治していけばいい」

リオ「…はい、ありがとうございます」

ジュード「じゃあ、カラハ・シャルへ向かおうか」

ミラ「うむ、そうしよう」

リオ達はカラハ・シャルへ向けて出発した

6 (後書き)

リオの精霊術にTOD2のジューダスの晶術を使ってみました
まあジューダス＝リオンですから、そこは許してください

トラウマ発動後のリオですが、本来のリオが一時的に表にでた感じ
です。

この話ではエリーゼしか見てませんが、このときのリオを見たら、
多分全員フリーズするくらいのギャップがあります(笑)
本来のリオは可愛いんです！

精神年齢

普段：20歳

発動後：11歳

ですから

カラハ・シャル

ジュード「やっとカラハ・シャルに着いたね」

アル「えらく遠回りしちゃったな」

ティポ「もうでっかいおじさん来ないかなー？」

ミラ「流石にこの雰囲気の中まで追ってくるとは思えんな」

リオ「でっかいおじさん…ですか？」

エリー「はい、髭を生やした大きいおじさんです」

ティポ「僕たちを連れて行くことするんだよー！ひどいよねー？」

リオ「まさか…ジャオおじさん？…いや、まさかね…それをジュードさん達が守った。ということですか」

ジュード「うん、そういうことかな」

会話をしながら歩いていくと、街の入り口に兵士が立っているのに気づいた

アルヴィンは、ミラとジュードに気にしないようにと視線を送り、

前のお店の品を見始めた

アル「おっ、この店、なかなか良い品が揃ってるな」

「いらっしゃい。どうぞ見ていってください」

ミラ「骨董か…ふむふむ」

アルヴィンは少し周りを見渡し、店主にそれとなく聞いていた

アル「なんだか、街のあちこちが物騒だな」

「ええ、なんでも首都の軍研究所にスパイが入ったらしくてね。王の親衛隊が直々に出張ってきて、怪しい奴らを検問しているんですよ。全く迷惑な話で……」

店主はジュードの顔を見た途端、驚きの表情をしていた

ジュード「あ、あの、えっと……」

自分を見て驚いている店主に焦っていると

エリー「わあ…綺麗なカップ」

リオ「そうですね」

エリーゼの後ろにいた女性が手に取ったカップを見て感動しているようだ

ティポ「でもこーゆーのって高いんだよねー」

女性たちの言葉を聞き誇らしげに

「そりゃあ、そいつは【イフリート紋】が浮かぶ逸品ですからねえ」
女性「まあ！イフリート紋！じゃあこれはイフリートさんが焼いた品なのね！」

女性が持っているカップに感動していると、ミラがカップを取り上げくるくと指の上で回し始めた

ミラ「ふむ、それはなかつ。彼は秩序を重んじる生真面目な奴だ。こんな奔放な紋様は好まない」
ミラの言葉に後ろにいた執事らしき初老の男性が

老人「ほっほっほっ、面白い方ですね、四大精霊をまるで知人のように」

「確かに、本物のイフリート紋はもつと幾何学的な法則を持つものです」

「おや、このカップは18年前に作られたものようですね」

「それが…何か？」

老人の言葉に若干焦りを見せる店主

老人「おかしいですね、イフリエットの召喚は20年前から不可能になっていませんか？」

「う、それは…」

老人の言葉に何も言えなくなっている

女性「残念、イフリートさんが作ったものじゃないのね……でも、
いただくわ。このカップが素敵なお事に変わりないもの」

「はい、お値段の方は勉強させていただきました」

買い物が終わわり、女性が話しかけてきた

ドロツセル「ふふ、あなた達のおかげでいい買い物ができちゃった。
私はドロツセル・K・シャルルよ、よろしくね」

ローエン「執事のローエンと申します。どうぞお見知り置きを」

リオ「（シャルル？…ではこの人達は領主の親族？）」

ドロツセルの自己紹介に、リオが少し考えていると

ドロツセル「そうだわ！お礼にお茶にご招待させて頂けないかしら
？」

アル「お、いいね。じゃあ後でお邪魔するのでしょうか」

ドロツセル「私の家は街の南西地区です。お待ちしておりますわ」
ドロツセルとローエンは一礼して去っていった

ミラ「私達にそんな暇はないのだから」

アル「ま、この街にいる間は利用させてもらう方が色々都合だろ」
ジュード「確かにそうかも、こんなに嚴重じゃ宿にも泊まれなさそうだし」

宿の方を見るジュード

ミラ「…ふむ。では、町の様子をつかってからお茶にするとしよう」

ミラの言葉に苦笑いしながらも頷く3人

ジュード「リオも来るよね？」

リオ「へ？…私もですか？」

アル「多分あちらさんはお嬢ちゃんも人数に入れてると思うぜ」

リオ「どうしましょうか…」

リオが悩んでいると、エリーゼが袖を引っ張ってきた

エリー「来ないん…ですか？」

ティポ「もっと一緒にいようよー」

涙目+上目遣いでリオを見る

リオ「うっ…えっと、あの」

リオの言葉にどんどん涙がたまっていくエリーゼ

アル「観念した方がいいんじゃない？本当に泣きだしそうだしな」

アルヴィンの言葉にリオは

リオ「……わかりました。一緒に行きますから泣かないでください、エリーゼさん」

リオの了承の返事を聞いて、涙は止まった　　が

エリー「むう」

ご機嫌斜めのような（笑）

リオ「あ、あの、どうしたのですか、エリーゼさん？」

エリー「……敬語」

リオ「え？」

エリー「リオさんに敬語使われるの、何か嫌です」

ティポ「あの時は敬語じゃなかったのにー」

リオ「あの時は、その…混乱してたからで、普段は…」

エリー「むう」#

リオの言い訳に更に機嫌が悪くなっていく（汗）

アル「い、いい機会だから敬語を辞めたらどうだ？」

ジュード「そ、そうだよ！出来れば普通に話してほしいな」

ミラ「う、うむ。そうだな、私からも頼む」

3人が焦りながらリオに頼んでいく

3人の心は一つになっている。それは…

『『『エリーゼが怖い』』』

と

リオ「わ、わかりました。ですが、敬語はすぐには無理なので、今は呼び捨てで許してくださいね…エ、エリーゼ？」

エリーゼ「はい！」

ティポ「しょうがないから、今はそれで許してあげるー」

ジュード「じゃ、じゃあドロツセルさんのところに行こうか」

アル「そうだな」

ミラ「うむ。行くとしよう」

ジュード達は、リオと一緒にドロツセルの屋敷へと向かった

7 (後書き)

ドロツセルと別れた後にオリジナルストーリーを入れてみました

それにしても…エリーゼが黒いです(笑)

ゲームを進めた人なら知っていると思いますが、ティポの言葉は…
ね。

カラハ・シャルル南西地区

リオ達は、ドロツセル達が待つ南西地区へ入った

ドロツセル「お待ちしておりましたわ」

ジュード「すごいお屋敷…」

リオ「（さすが領主邸、大きいですね）」

ジュード達はあまりの大きさに驚いていた

すると、屋敷から数名の兵士とラ・シュガルの王ナハティガルと、副官のジランドが出てきた

ミラ「あれは…」

アル「待て」

ミラが剣を抜こうとするのをアルヴィンが止める

ローエン「…お客様はお帰りになりましたか」

若干暗い顔になったローエンが呟く

ドロツセルは、そのまま私達の方へ振り返り、「どうぞ」

とって屋敷へ案内してくれた

そこで私達を迎えてくれたのは、とても優しくそうで、どこかドロツセルに似た感じがする青年の男性だった

男性「やあ、お帰り。お友達かい？」

ドロツセル「お兄様！」

ドロツセルは、そう言って男性に抱きついた

ドロツセル「紹介します…あ、まだみんなの名前を聞いてなかった」

クレイン「ははは、妹がお世話になったようですね。ドロツセルの兄、クレイン・K・シャルです」

ローエン「クレイン様は、このカラハ・シャルを治める領主様です」

ジュード「この街の領主!？」

ジュードはとても驚いていたが…

リオ「やっぱりそうでしたか…」

リオは一人呟いた

ローエン「やっぱり…とは？」

どうやらローエンに聞こえていたようだ

リオ「いえ、ドロツセルさんに自己紹介された時に名前にシャル

とついでにいたので、領主の親族だとは思っていました。流石に兄が領主とは思いませんでしたが」

ローエン「ほう、なかなか聡明なお嬢様ですな」

ミラ「よく気がついたな」

アル「へえ」

エリーゼ「リオさんすごいです！」

ティポ「リオ君かしこーい！」

クレイン「まあ、立ち話もなんです。どうぞ屋敷の中へ」

クレインに案内され、屋敷の中へ入る

屋敷の中は外観と同様に広く、家具や調度品などすべてが綺麗になつており、屋敷の美しさを引き立てていた

クレイン「なるほど、また無駄遣いするところを皆さんが助けてくれたんだね？」

ことの顛末を聞いたクレインは可笑しそうに笑った。それを見たドロツセルは口を尖らせた

ドロツセル「無駄遣いなんて！協力して買い物をしたのよね」

ティポ「ねー」

ドロツセルは同意を求めようとにエリーゼの方を向く。ティポが代わりに答えると、クレインは微笑んだ

すると、ローエンがやってきてクレインに何か耳打ちをする

クレイン「…わかった。みなさんの相手を頼むよ」

ローエン「かしこまりました」

クレイン「すみません、みなさん。これで失礼します」クレインは柔らかく断りをいれ、屋敷を出ていった

アル「俺も、ちょっと」

ジュード「アルヴィン？」

出て行こうとするアルヴィンをジュードが呼び止める

アル「生理現象。一緒に行くかい？」

そう言ってジュードにウインクするが、ジュードは慌てて顔を背けた

アルヴィンは軽く笑ってそのまま出ていった

ドロツセル「ねえねえ、みんな旅の途中なんでしょう？旅のお話を聞かせてちょうだい」

みんなを見回し、最後にエリーゼを見る

エリー「あの…わたし…」

ドロツセル「私、この街から離れたことがなくて…だから、遠い場所の話を知りたいの」

エリー「わたしも、外に出たことなかったです。でも…」

ティポ「ジュード君たちが連れ出してくれたんだー。海と森を通ってねー、波やキノコがすごかったー」

エリーゼとティポの話を楽しそうに聞いているドロツセル

リオ「（エリーゼも私と似たような環境だったんだ…だからかな？エリーゼの言葉がすぐ頭に入ってきたのは…多分心のどこかでわかつたんだろうな）」

ドロツセル「ねえ、リオ」

リオ「…ふえ！？」

ドロツセル・エリーゼ『『か、可愛い…』』

ドロツセル「…えっと、リオの旅の話も教えてちょうだい」

リオ「…私の話ですか？」

ドロツセル「リオも旅をしていたのよね、いつからエリーゼ達と一緒にいるの？」

リオ「…私達が出会ったのはこの街に入る少し前ですよ、サマンガン街道を歩いていたら魔物に囲まれてしまって…そこを助けてくれ

たのがエリーゼさ…エリーゼ達です」

さん付けで呼ぼうとしたら、エリーゼに睨まれました(汗)

「目的地が一緒だったので、誘われてついてきたらドロツセルさんに会いました」

ドロツセル「そうだったの、じゃあエリーゼ達と会う前は？」

リオ「エリーゼ達と会う前は」

その後も3人+1匹？で話をしていた　すると…

ミラ「そろそろ行くぞ。少し長居しすぎたようだ」

そういつて、席を立ち出て行くこととするのだが

ティポ「なにするんだよー」

クレインと共にやってきた兵士がリオ達に武器を突きつける

クレイン「まだお帰りいただき訳にはいきません…あなた方がイ
ル・ファンの研究所に潜入したと知った以上はね」

ジュード「な、なんのことが」

ジュードが何とかとぼけようとするが

クレイン「とぼけても無駄です。アルヴィンさんが全て教えてくれました」

ジュード「アルヴィンが!？」

ミラ「私達を軍に突き出すのか？」

クレイン「いいえ、イル・ファンの研究所で見たことを教えてほしいのです。ラ・シュガルは、ナハティガルが王位に就いてからすっかり変わってしまった…何がなされているのか六家の人間ですら知らされていない」

ミラは踵を返し席に着く

ミラ「…軍は、人間から強制的にマナを吸いだし、新兵器を開発していた」

クレイン「人体実験を!？まさか、そこまで……」

「嘘だと思いたいが…事実だとすれば、すべてのつじつまが合う」

ミラ「実験の主導者はラ・シュガル王、ナハティガルなのか？」

クレイン「そうなるでしょう」

ミラ「……」

クレイン「…ドロツセルの友達を捕まえるつもりはありません。ですが、即刻この街を出て行っていただきたい」

静かに席を立ち上がるミラ

ジュード「ありがとうございます。クレインさん」

クレインは何も言わずこの場を離れた

ジュード達はそのまま屋敷を出ていった

ドロツセル「ねえ、リオ。あなたはどつするの？」

リオ「……私も行きます。今の話を聞いて、はい、サヨウナラって訳にはいきませんかから」

リオもジュード達の後を追って屋敷を出ていった

屋敷を出て広場に向かうと、アルヴィンを発見した

アルヴィンもジュード達を見つけ、挨拶してきた

アル「よ」

ジュード「アルヴィン!？」

ティポ「アルヴィン君ヒドイよー!バカー!アホー!略してバホー!」

そういつてアルヴィンの顔に噛みつこうとしたのをミラが止めた

ミラ「なぜ私達をクレインに売った」

アル「売ったなんて人聞きの悪い。シャルル卿が今の政権に不満を

持つてるのは有名だからな、情報を得るにはうってつけだ。いい情報聞けたろ？」

アルヴィンの話にミラは黙り、話を進めることにした

ミラ「ラ・シュガル王ナハティガル…こいつが元凶のようだ。ナハティガルを討たねば第二、第三のクルスニクの槍が作られるかもしれない」

ミラの話にジュードが戸惑う

ジュード「王様を討つの…？」

ミラ「ああ、君たち国民は混乱するだろうが、見過ごすことはできません」

ジュード「うん…人から無理矢理マナを引き出して犠牲にするようなこと、放っておけない」

私達が話していると、兵士達が集まってきた

「お前ら、手配書の…！」

アル「はっ、往来で堂々としすぎたかもな」

リオ「（足止めくらいなら私でも）」

武器を構えようとするミラ達…そこへ

ローエン「南西の風？…いい風ですね」

ジュード「執事さん？」

ローエン「この場は、私が…」

そう言つて、兵士達に背を向ける…疑問に思つた兵士が声を上げる

「おい！じいさん！こっちを向け！何を企んでいる！」

前を向く際にナイフを3本、空へ向かつて投げた。兵士達は気付いていない

リオ「（早い！…それに、さっきの言葉…風を計算に入れて刺さる場所を決めた？なら…言葉で兵士を誘導するはず）」

ローエン「おおっと、怖い怖い」

両手を振るローエン

「おや？後ろのお二人、陣形が離れすぎてはいませんか？その位置では一呼吸で互いをフォローできる間合いではないですよ？」

ローエンに言われ、後ろの兵士達は近づく

兵「貴様…余計な口をきくな！」

ローエンが陣形について話し出すと怒り出す兵士

ローエン「そしてあなた、少し前過ぎではありませんか？それでは私はともかく後ろの皆さんを拘束できません」リオ「（やっぱり…」

言葉巧みに誘導してる…凄い人、何者だろう」

ローエンの誘導に感心していると

「ふん」

ローエンに言われ、少し下がる兵士

ローエン「いい子ですね」

ローエンがそう呟くと

ポオン！　ポオン！　ポオン！

先程投げたナイフが地面に刺さり、3人の兵士を拘束した

「ぐっつ！これは…」

驚き慌てる兵士達

ローエン「それでは、これで失礼します。さあ、みなさん、こちらへ」

ローエンに連れられて、シャルル家の前まで戻ってきた

シャルル家前

ティポ「ローエン君すごいー！こわいおじさん達もイチコロだねー
！」

ローエン「いえいえ、イチコロなどとてもとても。私程度ではただ
の足止めです」

ジュード「助かりました。ありがとうございます、えっと…ローエ
ンさん」

ローエン「ローエンで結構ですよ、みなさんも是非そう呼びくだ
さい」

ローエンは紳士のような立ち振る舞いでお辞儀をする

ミラ「それでローエン、我々に用があるのだろうか？」

ローエン「おや、直球ですね」

ミラがローエンの様子に気付き、腕を組んで問いかける。よく見る
と、少し焦っているように思えた

ローエン「実は、みなさんにお問い合わせがあるので」

アル「お尋ね者のいる一行に？あんまり楽しそうな話じゃなさそう
だ」

アルヴィンにそう言われ、少し早口で話し出した

8 (後書き)

今回は、クレイン救出に向かう前までです

ローエンに助けられる場面で、誰もが？思ったであろうことをリオの思いにしてみました

流石ローエンですよー

ジュード達のような濃いキャラ達と関わって、どんどん人間らしい感情が戻ってきています。

完全に戻るのはまだ未定ですが、もしかしたら早いかも？

ローエン「先程、ラ・シユガル王が屋敷に来られ、王命により街の民を強制徴用いたしました」

ミラ「何？ナハティガルが来ていたのか？」

リオ「ねえ、これって…もしかして…」

ジュード「人体実験…？」

ローエンを見るが、そこまではわからないと首を横に振る

ローエン「民の危機を感じた旦那様は、徴集された者達を連れ戻しに向かわれました。しかし、ナハティガルは反抗者を許すような男ではない…」

エリー「ドロツセルのお兄さん…危ないの？」

思い詰めた表情でローエンは頷く

エリーゼは不安そうにティポを抱きしめた

ローエン「力を貸しては頂けませんか？クレイン様をお助けしたいのです」

全員を見回して、ローエンは頼み込む

リオ「（ローエンにとってクレインさんは大切な人なんだ…そして、領主であるクレインさんは民が何よりも大切。だから、こんなに

も必死なんだ：私にとっての大切な人って、誰なんだろう…」

ジュード「クレインさんもだけど、連れて行かれた人たちも心配だし、助けにいこう」

アル「あーあ、優等生のお節介に火がついちゃったな」

ミラ「いいだろう。あれを使おうというナハティガルの企みは見過ごせない」

アル「だってさ」

ローエン「ありがとうございます」

「民が連れて行かれたのはバーミア峡谷です」

「バーミア峡谷は、クラマ間道を抜けた先にあります。急ぎまじょう」

バーミア峡谷

クラマ間道で何度か戦闘になったが、なんとかバーミア峡谷まで辿り着いた

ジュード「すごい地層…」

ローエン「ここはラ・シュガルでも有数の境界帯ですからね」

ティポ「もしかして、ここを登るのー？疲れちゃうよー」

エリーゼは峡谷を見上げている

リオ「確かに、エリーゼには辛い場所かもしれないな……」

そう思いながら、辺りを見回していると、岩陰の所が光ったのに気がついた

リオ「っ！？エリーゼ……！」

ヒュツと風を切る音が聞こえた瞬間、エリーゼとティポを抱きしめてその場から飛び退く

同時に複数の矢がみんなを襲い、リオ達は岩陰に身を潜めた

アル「軍か」

ミラ「よほど見られたくないことをしているのだろう。アルヴィン……！」

銃を構えて敵を撃とうとするが、敵の狙撃ですぐに身を潜める

アル「ちっ、こつ場所が悪いと狙いが定まらねえよ」

ミラ「何とか隙をつくれれば……」

みんながどうするか悩んでいると

リオ「ここは、私に任せて貰えないでしょうか」

リオが名乗りを上げた

アル「おいおい、大丈夫かよ。お嬢ちゃんは術師だろ？」

リオ「みんなと一緒にいるのに足を引つ張りたくないんです」

ジュード「足を引つ張るだなんて…」

エリー「そんなことないです」

ティポ「そうだよー。リオ君は強いよー」

ミラ「リオ…行けるのか？」

リオ「はい。…それとアルヴィンさん、私は術師ではありませんよ？」

アル「は？」

リオ「私は…」

一人立ち上がり、岩陰から姿を現す

それを見た兵士がリオへ向けて矢を放ってきた

リオ「スピードが自慢の双剣士です！」 シュンッ

アル・ジュード・エリーゼ・ローエン「……えっ！！？」「……」

首を傾け矢を避けた後、その場から姿を消す

すると……ドンッ！ドサッ

上の岩陰から、吹き飛ばされ気絶した兵士が飛び出し、少し遅れて
リオが姿を現した

リオ「大丈夫ですか？」

アル「マジかよ……」

ジュード「全然見えなかった……」

エリーゼ「すごいです！」

ティポ「すごすぎるー！」

ローエン「まさかこれほどとは」

ミラ「流石だな、私にも見切れなかった」

リオ「見切られたら自慢になりませんか？」

ミラ「ふふ、そうだな」

リオの活躍により、狙撃してきた兵士達を倒した

ミラ「よし、先に進むぞ」

そうミラが話した直後、先の洞窟で何かが光り、妙な気配が漂って
きた

ジュード「これは…イル・ファンで感じた気配？」

ティポ「なにになに？お化け？」

ミラ「まさか…ここにもあの装置が？ 急ぐぞ！」

ミラがそういつて我先にと走り出す。他のメンバーもそれを追って洞窟内に入っていった

そこにあつたのは、とても大きな機械。いくつもある機械から光が放射され、上にある繭のようなものに当たっていた

そのまま中に入ろうとしたが、結界のようなものが張られており入れなかった

ローエン「これは…旦那様！」

周りを見渡すと、ガラス張りの檻にクレインや街の人たちが閉じ込められていた

今にも飛び出していきそうなローエンだったが、結界には触れようとはしなかった

ミラが手を伸ばして、結界に触れようとしたが

アル「止めときな、手が吹き飛んじまうぞ」

そう言つてミラを止めた

ジュード「あの装置、研究所でハウス教授を殺したやつと似てるんだ！」

ミラ「ここでも黒匣の兵器を造ろうというのか？それほど容易く造れはしないはず」

すると、ミラは何かに気づき、結界の方へ向き直り、何かを取り出した

その後、ミラは黙り込んでしまった

ミラ「…私達を追うのを止めた理由がこれか…下らぬ知恵ばかり働く連中だな」

ローエン「展開された魔方陣は閉鎖型ではありませんでした。

余剰の精霊力をドレインしていると考えるのが妥当です。

谷の頂上から侵入して、術を破壊できれば…」

ジュード「みんなを助けられる？」ローエンの考えを理解し、そう続ける。確かに、他に侵入方法は見あたらなし、探している時間もない

ミラ「…行こう、ジュード」

ミラも賛成なのか真っ直ぐにジュードを見た

誰も反対することなく、リオ達は頂上を目指し、峡谷を登り始めた

9 (後書き)

ローエンの頼み、バーミア峡谷登頂前まででした。

バーミア峡谷での狙撃兵を倒すイベントは、原作ではジュードが矢を避けましたが、リオにやって貰いました
オリ技で、縮地も使ってみました(笑)

今現在、パーティーの中で、リオが一番強いです。四象刃+ガイアスに鍛えられてますから(笑)

バーミア峡谷頂上

リオ「エリーゼ、大丈夫？」

エリー「は、はい…大丈夫…です」

山登りに加えて、度々魔物と戦闘を繰り返しているため、体力の消耗が激しいようだ

エリーゼから視線を外し、周りを見ると、中央に開いている穴から紫色の光 精霊力が勢いよく吹き出していた

ジュード「くっ…コアが作動してる！けど、この高さ…」

アル「どうするよ」

ローエン「時間がありません。吹き上がる精霊力に対して魔方陣を展開します。それに乗ってバランスをとれば、無事に降下できるかもしれません」

ミラ「つまり、飛び降りると？」

アル「てことは、コアを狙うチャンスは一度か…」

ジュード「…行こう、みんなを助けなきゃ」

ミラ「ああ、他に手はない」

ローエン「ふふふ、なかなか度胸があたりだ」

アル「見かけによらずな」

ローエン「お嬢さん方はここで待っていますか？」

リオ「私は行きます。ここまで来て見てるだけなんて嫌です」

ローエン「エリーゼさんは待っていますか？」

エリーゼは首を横に振って、リオの手を掴んだ

リオは、ポフツとエリーゼの頭に手を置き、軽く撫でた…『大丈夫』
…その意味を込めながら

ローエン「気をつけてくださいね。では、参りますよ！」

ローエンはナイフを上空に投げ、魔方陣を展開した。それは、凧のような形を作り、ゆっくりとこちらに降りてきた

リオ「では、私もアシストしましょう。ローエンさんにだけやらせるのも悪いですから」

そう言って、リオは詠唱を始めた

リオ「悠久の風、敵を阻む守りの風陣！ウインドフィールド！」

ローエンの展開した魔方陣を中心に、周りに風の膜が出来た

リオ「これで、多少ですが揺れは収まると思います。この膜は外からの力にのみ働きますので、銃を撃っても問題ありません」

アル「はは、すげえなこりゃ。助かるわ」

リオ「…エリーゼ、手を握っててもいい？まだ男性が怖くて…エリーゼがいれば大丈夫だと思うから…」

エリーゼは何も言わずに、ギュッと手を握り微笑んだ

こうして、リオ達は吹き荒れる光の渦の中をコアを目指して進んでいった

しばらく進むと、この光の渦を生み出しているであろう核が見えてきた

ジュード「見えた！アルヴィン！」

アル「嬢ちゃんのおかげでマシンなんだろうが、こつ揺れちゃまともに狙えねえ！」

すると、ジュードは自分の体でアルヴィンの腕を固定した

ジュード「これなら！」

アル「気が利くな」

アルヴィンの銃撃がコアを破壊し、マナの強制吸収が止んだおかげ

で、牢に閉じこめられていたクレインや街の人たちが解放された

ローエン「旦那様！」

クレイン「うう…」無事に下に降りたりオ達。ローエンはすぐにクレインに駆け寄るが、クレインは気を失ってしまった

暫くすると、クレインが目を覚ました

クレイン「…うう」

エリー「気がついた？」

クレイン「すまない、忠告を聞かず突っ走った結果がこれだ…」

ローエン「ご無事で何よりです」

ミラ「ナハティガルはここに来ているのか？」

クレイン「僕もあの男を問い詰める気で来たのですが、親衛隊に捕らえられてしまって…」

ミラ「そうか…」

ナハティガルが居ないことに残念そうなミラ

ティポ「もーこんなとこ、早く外に出ようよー」

アル「だな。長居は無用だ」

外に出ようとするリオ達だったが

【ポオオオオン！】

大きな機械の上にあつた繭のようなものが突如光り始め、中から力マキリのような不思議な生命体が出てきた

ミラ「危ない！下がれ！」

ジュード「何こいつ！」

ミラ「来るぞ！構えろ！」

生命体は鳴き声をあげながらリオ達に襲いかかってきた

リオ「あの生物から精霊達の悲鳴が聞こえる…なら…あれは、微精霊！？」くっ、今は動けなくする方が先ですね…」

ローエン「これは…敵は強力な精霊術を纏っています」

ミラ「こいつを生むのが目的か」

ジュード「でも何か、この感じどこかで…」

アル「分析は奴を倒してからにしてくれ！」

全員が攻撃を仕掛けるが、空を飛んでいるためか、攻撃が当たりにくい

ミラ「くっ！飛んでいる敵がこれほど厄介とは…」

ローエン「ならば、地に落とす方が良さそうですね」

ローエン「大气よ、我が敵に地の圧力を！エアプレッシャー！」

ローエンの精霊術により、変異体にかかなりの圧力がかかり地面に落ちる

ジュード「今なら！三散華！」「連牙弾！」「掌底破！」

拳と蹴りで連続攻撃を繰り出し、さらに踏み込み掌底を叩き込む

ミラ「そこだ！グレイブ！」

ジュードの掌底に合わせるように精霊術を発動させ、鋭い石柱を当てる

アル「行くぜ！爪竜連牙斬！」「地竜閃！」

剣と銃で連続攻撃をし、剣を地面に突き立て、衝撃波を飛ばす

エリー「みんなに安らぎを！ピクシーサークル！」

敵の空からの攻撃に、傷を負っていく仲間を癒す

ジュード「行くよ、ミラ！」

ミラ「了解した！」

「玄武散！」

ジュードとミラが共鳴し、共鳴術技を発動させ、岩で拳を作り敵を殴りつける

リオ「私も行きます！エリーゼ！」

エリーゼ「わかりました！」

「全てを消し去る深淵の闇」「冥府より召喚されし数多の槍」

「デモンズランス・ゼロ！」

上空に闇の門が開き、数十の闇の槍が四方から変異体を襲った

二人の攻撃が決め手となり、
変異体は地に伏した

ミラ「厄介なやつだったな」

ティポ「でも、きれいだったよ？」

ローエン「自然に生まれた魔物ではないようです」

ジュード「もしかして、こいつは…」

地に伏し動かなくなった変異体に、剣を向け切ろうとするミラだったが、ジュードとリオが立ちふさがり止められた

ジュード「駄目だよ！」

リオ「だめえええ!!」

ミラ「何のつもりだ!」

ジュード「よく、感じてみてよ」

リオ「ミラさんならわかるはずですよ」

ミラ「なに?」

ジュード・リオ「微精霊だよ()ですよ」「」

ミラが変異体の方へ視線を向けると、変異体は光に包まれ光の粒子となって空に消えていった

ローエン「おお、これは……」

ティポ「すごい!すごい!」

ミラ「……ありがとう」

ジュード「えっ?」

ミラ「我を忘れ、危うく微精霊を滅してしまつところだった」

ジュード「あ、いや……」

ミラ「リオも、ありがとう」

リオ「いえ、私は微精霊を助けたかっただけですから」

リオの最初から知っていたかのような言葉に首を傾げるが、気にしないことにした

ローエン「さあ、カラハ・シャルルへ戻りましょう。みな大量にマナを吸い取られて相当弱っています」

ローエンの言葉に頷き、クレインや街の人たちを連れてカラハ・シャルルへ戻っていった

10 (後書き)

山頂から侵入しクレイン達救出まででした。

今回は、ジュード×ミラ、リオ×エリーゼの共鳴術技を書いてみました

デモンズランス×ネガティブゲイト〓デモンズランス・ゼロです。
イメージ的にそうかなと思ひまして

共鳴術技は書きにくいです…書いたらそれで戦闘が終わってしまう
感じかして…(泣)

カラハ・シャル

カラハ・シャルに戻ると、ドロツセルが門の所で待っており、クレインのことを見つけると駆け寄ってきた

ドロツセル「お兄様！」

クレイン「僕は大丈夫だ。それよりも、この人達を早く病院へ」

近づくドロツセルと共にいた兵士達にクレインは指示を出す

「はっ！」

クレインの指示に従い、兵士達はマナを大量に吸い取られた民達を病院へ連れて行った

屋敷に戻り、少しして落ち着きと疲れを回復させたクレインが、ドロツセルとローエンと共にやってきた

ローエン「徴集された民もみな、命に別状はないようです」

クレイン「みなさん、本当にありがとうございます」

ドロツセル「私からもお礼を申し上げます。ありがとうございます」

た」

ジュード「みんな無事でよかったです」

3人にお礼を言われ、民達の命に別状がないことがわかったジュードは安堵して言った

ミラ「では、私達は行くのでしょうか」

ティポ「え！もう行くのー？」

ミラの言葉に残念そうにするエリーゼとティポ

アル「ここからだガンダラ要塞を抜ける必要があるな」

ローエン「ガンダラ要塞ということは…皆さんの目的地はイル・ファンですか？」

ミラ「そうだ」

クレインは心配そうにリオ達を見回す

クレイン「ガンダラ要塞をどう抜けるつもりなのですか？」

ミラ「押し通る…しかないのかもしれないな」

クレイン「流石にそれは難しいでしょう。この時期のガンダラ要塞は非常態勢を取っているはずですよ」

「僕の手の者を潜ませて通り抜けられるよう手配してみます」

ジュード「僕たちに協力したりして大丈夫なんですか？僕たち、軍に追われている身ですし……」

ジュードがクレインの身を案じてたずねる

クレイン「元々、我がシャール家はナハティガルに従順ではありませんし、先ほど軍に抗議し、兵をカラハ・シャールから退かせるよう手配したところです」

ミラ「これ以上軍との関係は悪化しようがない……ということか」「ミラの言葉にクレインは頷いて返す

その後、話がまとまり、クレインの厚意に甘えて、ガンダラ要塞への手配をして貰うことになった

それまでシャール家でお世話になることになった

夜

リオは隣で寝ているエリーゼとティポを起こさないように、そっと部屋を抜け出し、エントランスにある椅子に腰掛けぼんやりと月を眺めていた。その姿はとても幻想的で美しく、しかしどこか儂げで、今にも消えてしまいそうなほど悲しい気持ちにさせた

リオ「（みんなとは少ししか一緒にいないけど、凄く気にかけてくれているのがわかる。私も最初に比べて感情が戻ってきてると思うし、男性恐怖症も少しずつ治ってきてる……でも、このまま一緒にいていいのかな……こんな、化け物みたいな私が……）」

リオが物思いに耽っている

ローエン「…眠れないのですか？」

リオ「！？……ローエンさん」

ローエン「そのまま結構ですよ。あなたが男性が苦手ということは何っておりますので」

リオ「…お気遣いありがとうございます」

ローエン「いえいえ。それで、このような時間にどうされたのですか？」

リオ「すこし、考え事を……」

ローエン「何か悩みがあるようですね、もし宜しければじいじに話してはみませんか？人に話して楽になることもありますよ」

リオ「……そうですね、ローエンさんなら信用できそうですし……聞いて貰えますか？」ローエンが優しく微笑み頷くのを見たりオは、静かに話した

時は少し遡り

エリー「（…あれ？ミラもリオもない……どこに行ったんだろ）」

エリーゼは二人がいらないことに気づき、眠い目を擦りながら二人を探すために部屋を出た。すると、「してはみませんか」「いて貰えますか？」と、下の方から誰かの話し声が聞こえてきた。

エリー「（誰だろう…あれは、リオとローエンさん？何話してるんだろう）」

エリーゼはそっと聞き耳を立てて、話を聞くことにした。

リオ「…私なんかが、みんなと一緒にいていいのかな…って思ってたんです」

エリー「（……えっ?）」

ローエン「それはまたどうしてですか?」

リオ「みんなが私に良くしてくれているのは知っています…そのおかげで、感情も男性恐怖症も治ってきました。こんな短期間で仲良くなれたのは初めてです。私を拾ってくれた家族とも打ち解けるのに6年かかりましたから」

ローエン「拾われた…ですか」

リオ「ええ、11歳の頃に道に倒れていたのを助けられたんです。その時の私はまさに『人形』でしたから」

エリー「（どういことだろう…）」

ローエン「人形…ですか?」

リオ「…ローエンさん、今までで私が感情を露わにしている所、見ましたか？」

ローエン「そう言われれば、見たことはありませんね…まさか!？」

リオ「はい。ある出来事がきっかけで私は笑うことも、怒ることも、泣くことも、喜ぶこともないんですよ。あるのは『恐怖』この感情だけです」

エリーゼ「(そんな!?!? だからあの時)」

「今は普通に会話をしていますが、最初は何も見ず、何も聞かず、何も話さずただ部屋に閉じこもっていました。…今でも、男性で平気なのは家族だけです」

ローエン「そうでしたか…(恐らく、原因は男性恐怖症に関係しているのでしょうか) もしや、その出来事とは…」

リオ「ローエンさん」

ローエン「!…失礼いたしました、配慮が足りませんでしたね」

リオ「いえ、解っていただければそれでいいです」

ローエン「ですが、感情だけではそのような考えには至らないと思います」

リオ「…私には特殊な力があります。普通の人ではあり得ない力が…だからですかね。…私は自分を人とは思っていませんから…(ボソッ)」

「…では、失礼しますね。お話を聞いていただいて、ありがとうございました」

困惑するローエンにお礼を言って、リオは部屋へ戻っていった

エリーゼも慌てて部屋に戻り、ベッドの中に潜り込んだ

ローエン「『私は自分を人とは思っていませんから…』…ですか。一体、リオさんは何を抱え込んでいるのでしょうか」ローエンには、最後の言葉を言ったときのリオの悲しそうな目がとても気になった

ミラたちの客間

リオ「（人に過去を話したのは初めてかな。…エリーゼにも聴かれていたみたいだし）」

そう、あの時リオはエリーゼが聞いていたことに気づいていた。だからローエンの言葉を遮り、濁したのだ

リオ「（これでみんなの態度が変わらないといいな…）」

そう思って、リオも眠りについた

数日後

エントランスに集まっていたリオたちは、クレインに手配の状況を聞いてみたが、まだわからないとのことだった

クレイン「それでは、ローエンを確認に向かわせましょう」

ミラ「頼めるか？」

クレイン「わかりました」

リオ達は屋敷から外へ出てきた

クレイン「では、ローエン。よろしく頼む」

ローエン「かしこまりました」

ドロツセル「ローエン、どのくらいで戻ってくるの？」

ローエン「そうですね…馬を使えば一日もあれば戻れるかと思いません」

ローエンの答えを聞き、ドロツセルは悲しそうな顔をする

ドロツセル「それなら、もしかしたら明日にはみなさんとお別れかもしれないのよね」

アル「首尾よく進んでいれば、そうなるかもしれないな」

その言葉で、エリーゼとティポも悲しそうな顔になる

ドロツセル「それなら、エリー、ミラ、リオ。お買い物に行きましよう」

ティポ「お買い物？行くところ！」

リオ「へ！？私も？」

パン、と手を合わせて言うドロツセルにティポが嬉しそうに返事をする

リオは「私は、別に…」と行くのを渋っていたが、エリーゼの「行かないんですか？」という涙目＋上目遣い＋袖をキュツと掴む行為を見て、仕方なく折れた

すぐに笑顔になるエリーゼだったが、ジュードとアルヴィンは、その時のまるで『計算通り』と言わんばかりの　フツ　という顔を見て、二人の心は再び一つになった

『『エリーゼ、黒い…』』

ドロツセル「決まりね　さっそく行きましょう」

ミラはドロツセルとエリーゼに両腕を掴まれて連行されていく

ミラ「まで、話がみえない」

ドロツセル「エリーとお買い物の約束をしたもの。明日お別れかもしれないのならチャンスは今日だけよね？」

ミラ「それはそうだな、行ってくるといい」

ドロツセルとエリーゼが笑いあい、高く腕を振り上げた

ドロツセル「じゃあ、出発」

ティポ、エリーゼ「出発」

ミラは二人にずるずると引きずられていく。

ミラ「だから、何故こうなるんだ、私がいく必要はないだろう」

アル「いいんじゃないの？」

ジュード「たまには人間の女の子っぽい事するのも面白いかもよ？」

ミラ「ふむ、なるほど。だが、厳密には私に人の性別の概念は当てはまらないぞ。現出する際に人の女性の像を成したが…」

ジュード達は引きずられていくミラを見ながら苦笑いしていると、
リオがまだいる事に気がついた

ジュード「リオは行かなくていいの？」

リオ「いえ、何か嫌な予感がするので保険を、と思ひまして…」

クレイン「嫌な予感ですか？」

アル「おいおい、縁起でもねえ事言つなよ」

リオ「私の嫌な予感は、不本意なことによく当たってしまうんですよ」

すると、リオは何かの精霊術を唱え始めた

リオ『聖なる光、災厄を払い友を守る不可視の盾、インビジブル・シールド』

リオが何かを発動させたようだが、見た目には何も変わっていないかった

リオ「これで大丈夫でしょう。では、私はミラさん達を追いかけますね」

そういつて、リオはミラ達を追いかけて行ってしまった

ジュード「何をしたんだろうね」

アル「さあな、だが何かありそうだから使ったんだろ」

クレインは何かを考えた後、静かに話しだした

クレイン「この今の幸せのためにも僕は決心しなければならぬ…
…やはり、民の命を弄び、独裁に走る王にこれ以上従うことは出来ない」

アル「…反乱を起こすのか？」

クレインは頷く

ジュード「…戦争になるの？」クレイン「ナハティガルの独裁は、ア・ジュール侵攻も視野に入れたものと考えられます。そして、彼は民の命を犠牲にしてもその野心を満たそうとしますでしょう。こ

のままではラ・シユガル、ア・ジュールとも無為に命が奪われる」

クレインの言葉に顔に陰りを見せるローエン

「僕は領主です。僕の成すべき事、それは、この地に生きる民を守ること」

ジュード「……なすべきこと……」

クレイン「そう、僕の使命だ。力を貸してはくれませんか？」

クレインはジュードに手を差し出す

ジュード「ぼ、僕は……」

クレイン「僕達は、ナハティガルを討つという同じ目的を持った同志です」

その時、クレインの胸に矢が刺さる！ 寸前の所でガキン！、と音がして、何かに阻まれ矢が地面に落ちる

ローエン「旦那様！」

ジュード「クレインさん！」

アル「ちい！！嫌な予感つてのはこれか……！」

ドンー！

アルヴィンは狙撃してきた兵士を撃ち殺す

ジュード「早く治療を！」

クレインを治療しようとするジュードだったが

クレイン「大丈夫です、僕に矢は刺さっていません。リオさんの精霊術が守ってくれたようですね」

アル「……やっぱりすげえな、あの嬢ちゃん。不可視の盾とは」

ローエン「……お嬢様達が危険です！」

ジュード達は急いで広場へ向かった

11 (後書き)

長くなりそうなので、今回はジュード編だけです

そして、クレイン生存！クレインは殺したくなかったので、リオに助けて貰いました

バーミア峡谷に続き、第2のオリ技使用。元々、リオはミラ編に入れる予定だったので、遠距離で使用する術がなかったものですから、常時展開のオリ術にしました

そして、久々の黒エリーゼが登場（笑）

シリアスだけではあれかなーと思ひまして

カラハ・シャル中央広場

リオがミラ達に追いつき、全員でいろいろな店を見て回っていた

やがて、一軒のアクセサリーの店に立ち寄った

ドロツセルは悩むようにまじまじと商品を見つめ、悩んだ末に一つのアクセサリーを手に取った

ドロツセル「決めた、エリーにはこれをプレゼントするわね」

ティポ「うわー、高そうー、ドロツセル君はお金持ちだねー」

ドロツセル「あら、ティポったら」

確かに、選んだ商品の値段を見ると、なかなか手の出せる値段ではなかった

ドロツセル「いいのよ、友達の証なんだもの。受け取ってちょうだい」

エリー「友達のですか？…ありがとうございます、ドロツセル」

エリーは笑顔でお礼を言った

ドロツセルは笑顔で頷くと、再び商品を眺め始め、一つのアクセサリーを手に取った

ドロツセル「はい、リオにはこれをプレゼントするわ」

リオ「私にも？よろしいのですか？」

ドロツセル「もちろんよ。私達、友達でしょう？遠慮する必要はないもの」

リオ「友達ですか……ありがとうございます。大切にしますね」

リオは僅か ほんの僅かだが嬉しそうな笑みを浮かべた
その笑みは、誰もが見惚れるほど美しい笑顔だった

ドロツセル、エリーゼ「っ！？／＼／＼／＼」

その顔を間近で見ってしまった二人は顔を真っ赤にしていた

リオ「??…どうかしたのですか？顔真っ赤ですよ？」

ティポ「えつとねー、リオ君の笑顔に二人とも見惚」「ダメ（です）！ティポ！」「ムギユツ」

ドロツセル「な、何でもないわ、気にしないで（リオの笑顔のせいなんて言えないわよ）」

エリーゼ「そ、そうです。気にしないでください（リオの笑顔が可愛かったなんて言えません）」

リオ「????？」

首を傾げるリオに、話を変えるため周りを見るドロツセル。ふと隣を見ると、ミラはとあるネックレスに目を留めていた

ドロツセル「ね、ねえミラ、そのペンダントが気に入ったの？」

すると、ミラは首を横に振ってペンダントについている珠を指差し

ミラ「これと同じ物を持っているのでな」と、懐から青い小さな珠を取りだした

ドロツセル「どうしたの？それ」

ミラ「いや、昔初めて人間の子供と遊んだ時に貰った物だ」

ドロツセル「大切にしてきたのね。なら、なくさないようにしないと」

「よろしければ、ペンダントにして差し上げますよ」

話を聞いていた店主が、そう薦めてくれた

ミラが頷き、珠を渡すと、店主は素早く加工していった

そして、あっという間にペンダントに変わり、ガラス玉も丈夫な金具に止められていて、簡単には取れないようになっていた

ミラ「これはなかなか良さそうだ。店主、感謝するぞ」

「毎度ありがとうございます」

「わあ、やめてください!」

店を後にしようとしたら、どこからか悲鳴が聞こえてきた

声のした方を見ると、別の鎧を着た兵士達が住民達を殴ったりしている

ドロツセル「乱暴はおやめなさい! 一体何のつもりです! ラ・シユガル軍はこの街から退去するよう領主から命を受けたはずですよ!」

すると、兵士達の後ろから以前見た男 ジランドが現れた

ジランド「あなたは…?」

ドロツセル「シャルル家の者です」

「ふん、何も知らぬ小娘が」

隣にいた兵士が言うが、ジランドが手を挙げて抑える

ジランド「これは王勅命による反乱分子掃討作戦です。大人しくしていただきますでしょうか」

ドロツセル「な、なんですって!?!」

ジランド「捕らえなさい、謀反を画策した領主家シャルルの者です(…ん?あの娘はまさか…)」

ティポ「ミラ君! リオ君! ドロツセル君! 早く逃げよ!」!

ミラ「ああ。何かが起きている、完全に包囲される前に退くぞ、遅れるな。三人とも」

ドロツセル、エリーゼ「う…うん！」

リオ「わかりました」

リオ達は、襲ってくる兵士達からドロツセルを守りながら退こうとしている。

しかし、倒しても倒しても集まってくる兵士達に追いつめられるリオ達

そして……

ミラ「うああ！」

エリー、ドロツセル「きゃあ！」

ティポ「きゅっ……」

ミラ達は敵の攻撃に気絶してしまった

リオ「くっ！数が多すぎますね…ですが！初めて出来た友達を渡すわけにはいきません！はあぁっ！」

リオはみんなを守りながら兵士たちを倒していく

ジランド「な、何をしていますのです！は、早く捕らえなさい！」

腰を抜かしたフリしたジランドが兵士達に命令する

兵士たちは一斉に精霊術を使った

リオ「くっ！（避ければみんなに当たってしまう…受けるしかないか）」

ドオオオン！

リオ「うああああ！！！」

敵の精霊術が直撃し、爆発が起き煙が上がる
煙がはれると、そこには腕を押さえ、ボロボロになったリオが立っていた

リオ「はあ、はあ、はあ（くっ、目が霞む…油断…しました…ね…みんなだけは、守り…たかっ…た…な…）」ドサッ

リオはみんなを守るように倒れてしまった

ジランド「ふう、ようやくですか。その者達を捕らえなさい」

ラ・シュガル軍は、リオ達全員を捕まえ、ガンダラ要塞へ向かっていった

12 (後書き)

次は長くなりそうなので、今回はここまでです

リオの笑顔に骨抜きにされた二人(笑)そのためにティポに自我を持たせました。

ガンダラ要塞

エリー「て、リオ！リオ！！」

リオ「う…エリー…ゼ…？」

リオはエリーゼに起こされて目を覚ました。ふと隣を見ると、ミラもドロツセルに起こされているようだ

ドロツセル「よかった、二人とも起きたのね」

ミラ「ここは…牢…か」

ドロツセル「ガンダラ要塞に連れてこられたの」

ミラ「そうか…リオ、済まなかった。その姿を見ればわかる…私達を守ってくれたようだな。感謝する」

ドロツセル「ありがとう、リオ」

エリー「ありがとう…」

リオ「いいですよ、お礼なんて。結局守れずにみんな此処にいるんですから…それに、友達…なんですよね？なら、助けるのは当然です」

エリー「リオ…」

エリーゼがそう呟くと、さっきの男が声をかけてきた

ジランド「お目覚めのようですね」

ミラ「貴様は！」

ガシャツ、とミラは鉄格子を掴む。しかし、男はそれを気にすることなくミラを見やった

ジランド「私は、ラ・シュガル軍参謀副長ジランド」

ミラ「ふん、ナハティガルの犬というわけか」

ジランド「ふふふ、褒め言葉と受け取りましょう。あなたに伺いたいことがあります。アレの“カギ”を持ち出しましたね？」

ミラはその言葉に目を細めるが「知らん」と答えた。しかし、ジランドは問い詰めるように続ける

「その上、どこかに隠したそうじゃありませんか？」

ミラ「知らない、と言ったはずだが」

あくまで白を切るミラに鼻で笑うジランド。隣の兵士に合図を送った後、リオ達は牢のあった部屋の外に出され、何かの前に立たされる

リオ「(何でしょう、凄く嫌な感じがします。この先には行くなつて事ですかね)」

ジランド「もう一度問います。“カギ”をどこに隠したのですか？」

ミラ「知らんと言ったろう」

ミラが言った直後、一人の兵士が女の人を突き飛ばした。彼女が何かの先に倒れ込んだ瞬間、爆発が起こった

パタリ、と女の人の手が力なく落ちた。目を覆いたくなるような光景に、エリーゼもドロツセルも目を瞑り顔を背けた

ジランド「自分たちの足をご覧なさい、彼女と同じものがついているでしょう？それをつけたまま、あの呪帯に入ると……ご覧の通りです」

ドロツセル「このような暴虐許されませんよ！サマングン条約違反ですわ！」

ドロツセルの言葉にもただ薄く笑っただけだった

ジランドは再びミラに向き直る

ジランド「さあ、“カギ”の在処はどこです？」

ミラ「くだいな。知らん」

その言葉にジランドが合図すれば、近くの兵士がエリーゼに手を伸ばす。が、リオがその手を阻んだ

リオ「エリーゼに触れないでいただけますか？」

リオの言葉に標的がリオに変わった

ミラ「おまえ達人の尺度での脅迫など、何の意味もない。傷つくこと、失うことは私にとって恐怖にならない。私でもその者達でもそこに突き飛ばしてみる。私の言葉が嘘ではないとわかるはずだ」

あまりの冷徹な言葉に、エリーゼとドロツセルは目を見開く

リオ「……まったく。他にも言い方はあると思いますが、これでエリーゼ達が突き飛ばされる心配はないでしょう」

辺りはシンと静まり返った。すると、ジランドの元に一人の兵士が駆け寄って、それから彼に耳打ちをする。それにジランドは頷いた

ジランド「ここは任せますよ。必ず“カギ”の在処を吐かせなさい」

そう言い残して、ジランドは去っていった

代わりに女の兵士がミラに剣を突きつける。しかし、ミラはそれにも動じない

ミラ「ふふ、困っているな。脅しが効かない時点で策は尽きたか？ なんなら身体検査でもしてみればどうだ？ もってないと解るはずだ」

ミラの言葉を聞き、女の兵はミラの体を探り始める

ミラは、リオに目配せして兵の隙について剣を奪い、リオは隠し持っていた長い針を首筋に当てる

リオ「ふふ、“油断大敵”ですよ？」

ミラ「こんな下らぬ罫に嵌るとは、平静を失っては成すべき事もなせないぞ？」

「そちらには人質は効果的だろう？武器を捨ててもらおうか」

兵士達は大人しくそれに従った

そして、ミラ達は兵達を全員牢へぶち込んだ

ミラ「さあ、脱出するぞ。ドロツセル、剣は使えるか？」

ドロツセルは首を振ると、ミラはエリーゼに目を向ける

しかし、エリーゼもふるふると首を振った

エリー「わたし…ティポがいないとダメなんです…ティポがいないと…戦えない…」

エリーゼは目に涙を溜めながら言う。ぼろぼろと流れ出す涙を見て、ドロツセルは彼女の肩を抱いた

リオ「二人は私が守りますから。心配しなくても大丈夫ですよ」

ミラ「そうか、頼んだぞ」

リオ「おまかせを」

ミラ「ふふ、では行く。まずはこの呪環を外さねば」

リオ「これは…無理矢理外すことは不可能みたいですね。おそらく、キーか、大元の制御装置を止めないといけないみたいです」「ミラ」「兵士たちは持つていなかったからな。では、制御装置を探そう。テープも、な」

エリーゼもミラの言葉に嬉しそうに頷いた

リオ「やっぱり仲間ですね。どんな言葉を使っても、ちゃんと二人を心配しているのですから」

ドロツセル「えっ?」

エリー「どういう…事ですか?」

リオ「先程のミラさんの言葉ですが、一見二人を見捨てるような言い方でした。しかし、そうではないと言うことです。あそこまで突き放してしまえば、突き飛ばされる心配はなくなるでしょうから」

ドロツセル、エリーゼ「ミラ…」

ミラ「は、早く制御装置を探すぞ! / / /」

リオ「ふふ、そうですね。行きましょう」

リオ達は制御装置を探すため進み出した

何度か戦闘をして、ようやくエレベーターと制御室のキーを手に入れた

エレベーターで降りた先にある部屋に入ると、ガラス張りの展望台がついた部屋だった

展望台から下を見降ろすと、そこにはジランドの姿があった

そこでは、人体実験が行われており、カプセルの中の人が霧散していくのを目にした。近くにはティポの姿もあり、それを見たエリーゼは思わず叫んだ

エリー「ティポ…！」

ミラとリオはガラスを突き破り、下に着地するとすぐさまジランドを睨みつける

ジランド「何！？お前たち、どうしてここに…！」

逃げ腰になるジランドを余所に、ミラはエリーゼとドロツセルにそこから飛べと指示した

エリー「え、そんな…無理…！」

リオ「大丈夫ですよ。私が受け止めますから、安心してください」

しかし、エリーゼは言葉を詰まらせる

ミラ「おまえの大事な友達がまた連れ去られてしまうかもしれんぞ」

エリー「ティポ…！」

研究服を着た人物がティポを掴んだのを目にして、エリーゼは小さく声を上げる

ミラ、リオ「飛べ（飛んで）！エリーゼ、ドロツセル（さん）！
自分の意志で！」

二人はぎゅっと目を瞑ってから、そこから飛び降りた

リオは、衝撃を与えないように、タイミングを見計らってキャッチする。ミラも、ドロツセルをキャッチしたようだ

そつとおろして、ティポに視線をやると、エリーゼは走ってティポを奪い返しにいった

取り返したティポを大事そうに抱えて戻ってきた

???「茶番だな、実にくだらん」

ジランド「ナハティガル王！」

向かいの扉から入ってきたのは、以前見た巨体の男、ローエンから聞いていた通り、彼がラ・シュガルの王ナハティガル

彼は部屋を見回してからジランドを見据え、そしてこちらに目を向けた

リオ「あれがナハティガル…私をこんな体にするよう命じた男…」

ミラ「ナハティガル！」

ミラは剣を抜き放ち、その場から飛び出した。ナハティガルはそれ

を片手で受け止める

ミラ「貴様のくだらん野望、ここで終わりにさせてもらっぞ！」

ナハティガル「この者が？」

まるで、見定めるかのようにナハティガルはミラを見る。そして、あるうことか抜き身の剣先を手で握った

ナハティガル「貴様のような小娘が精霊の主だと…？この程度で笑わせる！」

ナハティガルはそのままミラを宙に投げ、腹に鉄拳を食らわせた

その衝撃でミラは壁際まで吹っ飛ば

リオ「ミラさん！…ナハティガル…こんな体にされた借り、返させていただきます！やああつ！」

リオは素早い動きで連撃を加えるが、全然ダメージを与えられていなかった

リオ「くっ…攻撃が全然効きませんか…」

ナハティガル「貴様は…あの時の実験体か。だが、話にならない」

リオの連撃を片手で防ぎ双剣を弾き飛ばし、カウンターで腹に一撃入れた

リオ「うぐっ…かはっ」

ナハティガルの攻撃にその場に膝をつくりオ

そして、ナハティガルはリオの首を掴み、高く持ち上げた

リオ「…う…く…は、離…し…な…さい…」

リオは何とか手を外そうともがくが、その手は一向に外れない

ナハティガル「つまらんな」

そう言つて、リオをミラの近くの壁まで投げ飛ばす

ナハティガル「僕は、クルスニクの槍の力をもって、ア・ジュールをもたいらげる」

ジュード「それでカラハ・シャルを…！どうしてこんなひどいことばかり…」

いつの間にか現れたジュードが、ナハティガルに問う

ナハティガル「下がれ！貴様のような小僧が出る幕ではないわ！」

ジュード「ナハティガル王！」

不意に、ミラに視線が向けられた

ナハティガル「貴様などに我が野望阻めるものか」

ナハティガルがミラの剣をもって振りかぶり、ミラへ向けて投げる

ミラに刺さるかと思われた瞬間、投げられた剣がナイフによって阻まれ横の壁に刺さる

ナハティガル「イルベルト、貴様か…!?!」

ローエンを見て言うナハティガル。近くにいた兵士が呟いた

「ローエン・J・イルベルト……」

その名前にジュードは目を見開いた

ジュード「イルベルト…? 歴史で習ったあの“指揮者イルベルト”!?!」

ジランド「国も軍も捨てたあなたが、今更何のご用ですか?」

魔方陣で降りてきたローエンはジランドの問いを無視し、ドロツセルとエリーゼの元へいく

ローエン「お嬢様、ご無事で何よりです。心配いたしました」

ナハティガル「落ちぶれたなイルベルト。今の貴様にはそれが相応だ」ジランド「陛下、こちらへ! このような者共にこれ以上構う必要はありません」

ナハティガルはそのまま踵を返して扉から出て行った

ミラ「逃がさん!」

リオ「逃がしませんよ」

ジュード「ミラ！リオ！」

ミラと共にリオも出て行った。後ろでジュード達の呼ぶ声がしたが、そのままナハティガルを追っていった

後ろの方から扉が閉まった音がしたのを無視して

13 (後書き)

今回はここまでです

長くなりますので、ガンダラ要塞編は2部構成にします

リオの動きにカウンターを合わせるとは…どれだけ動体視力が良いんでしょうか

少しだけですが、ナハティガルは強くなっています

そうしないと、話が進まなそうなので(汗)

呪帯前

ミラ「待て、ナハティガル！」

リオ「待ちなさい！」

ミラ、リオ「はあっ！」

前に目的の人物を見つけた瞬間、ミラはファイアボールを、リオはスラストファングをナハティガルに向けて撃つ

しかし、呪帯に、黒匣によって阻まれる

ナハティガル「無駄だ、実験体と自称マクスウェル」

煙の中、目を細めながらナハティガルを睨みつける

ミラ「…答える。なぜ黒匣を使う？なぜ民を犠牲にしてまで、必要以上の力を求めるのだ？王とは民を守るものだろうか？」

リオ「国とは人。民なき国は国にあらず。民を守れぬ王など、王とはなり得ませんよ」

リオ達が声を張り上げて抗議するも、ナハティガルは顔色一つ変えずこちらを見ている

ナハティガル「ふん、お前等にはわかるまい、世界の王たる使命を！己が国を！地位を！意志を！守り通すためには力が必要なのだ！」

そして、あざ笑うかのように、見降ろすようにリオ達を見て言い放つ

ナハティガル「民は、そのための礎となる。些細な犠牲だ！」

ナハティガルの言葉にリオは啞然としていた。ミラは、すごく落ち着いていて、しかし凜とした雰囲気があった。同時に、激しい怒りもピリピリと感じられた

ミラ「貴様は一つ勘違いをしている」

ナハティガル「何だと？」

ミラは自分の足についた呪環を見て、そして呪帯を見上げる

ミラ「このようなもので自分を守らねば…黒匣の力などに頼らねば、自らの使命を唱えられない貴様に、出来ることなど何も無い。なすべきことを歪め、自らの意志を力として臨まぬ貴様などに」

ナハティガル「はっ！儂に傷一つ負わせられぬおまえ達が、何を言っても負け惜しみにしか聞こえんわ」

勝ち誇ったかのような表情で、ナハティガルは言う

ミラ「…どうやら、勘違いは一つではないようだな」

ナハティガル「なんだと？」

リオ「ナハティガル、あなたはミラさんを…そして、私を少々見くびっているようですね」

ナハティガル「貴様…」

ミラ「リオ？…まさか、お前！」

ミラは何かに気づいたのか、リオを見て声を上げる

リオ「私をこんな物くらいで…止められると思わないでほしいですね」

リオは呪帯の先に入り、ナハティガルに近づいた

それと共に爆発がリオを襲うが、それよりも早くリオが移動し、攻撃を仕掛ける

ナハティガル「バ、バカな!？」

斬りつけられたナハティガルは、あり得ない物を見るようにリオを見ている

リオ「私は守ると誓った…自分の魂に！自分の意志で！」

ドーーーーーン！

再び爆発し

ナハティガル「うおお！」

ナハティガルは爆風に巻き込まれた

ナハティガル「ふ、ふはははは！いくら自動で治癒するとはいえ、しよせんはこの程度か！」

そう言うナハティガルの声をたどって、リオが姿を現した

リオ「…私の友に！仲間！家族に！傷は負わせない！二度と失わないように……私が守る！はああああっ！」

ナハティガル「なんだと！」

リオ「いくらあなたでも、斬撃と爆発の同時では辛いでしょう？」

ザシユ！ドーン！

リオは腕を浅くだが斬りつけ、間近で爆発を浴びせたが、大した効果はなかったようだ。しかし……

リオ「はあ……、はあ……、はあ……」

ポロポロになりながらも、リオは立っている

ナハティガル「バ、バカな！？何故立っていられる！？実験は完璧には成功していない！あれほどの爆発をくらって立っているなど……貴様、本当に人間か！？」

ナハティガルはあり得ないという風にリオを見る

リオ「確かに成功はしていませんよ。効果は私が起きているときのみ、酷すぎる傷にはあまり回復しない……それでも、私は、自分を人間とは思っていませんよ。私は化け物ですから……」

ナハティガル「くそお！」

バキッ！

立ち上がったナハティガルはリオを殴り飛ばす。殴られたリオはミラの近くまで飛ばされた

ドン！ズザアアア...

ミラ「リ、リオ……」 動揺するミラ。その表情は…ナハティガルへ向ける表情は怒りで一杯だった

ミラ「貴様あああ！！！！」

斬りかかろうと走り出すミラを、リオがミラの腕を掴んで止めた

ガシッ！

ミラ「な、何をするリオ！」

リオ「ダメ…ですよ…。何の、ため…に…私…が、行った…か…わから…ない、じゃ…ない、ですか…！」

ナハティガル「くっ！ジランド！撤退だ！馬車を出せ！」

ジランド「は、はいい！」

ナハティガルは急いで馬車に乗り、出て行った

それを見たりオはそのまま意識を失った

ミラ「（リオが…私の代わりに…爆発した？

それに、自分を人ではないと言った…奴もリオを実験体と言っていた）」「ミラは信じられないというようにリオを見る

ミラ「（リオは常に冷静で、皆とは一歩距離を置いていた。しかし、いつも皆のことを気にかけていて、そういうのも悪くないと感じた。ふとした時に見せる悲しそうな目を見たとき、リオの力になってやりたいと思えた。

私は使命が大事だ。だが…だが！いつしかリオも私たちの中で同じくらい必要な存在になっていた！
くっ！私に治療術が使えれば！）」

ミラが自分の力不足を悔いていると

ジュード「ミラ！リオ！」

ミラ「はっ！」

声のした方を見ると、ジュードや皆が走ってこちらに近づいてきた

エリーゼとドロツセルはリオの状態を見て、目をそらす

ティポ「うわー、ぐちゃぐちゃだよー」

ローエン「これは…酷いですね」

ジュード「こゝ、これって！？」

ジュードは急いで治癒術を駆け始める

ジュード「エリーゼも手伝って！」

泣きそうな表情をするエリーゼもジュードと一緒に治癒術を使う

ミラ「頼む！リオを助けてくれ！私はリオに借りを返していない…
リオの力になれていない！」

ジュード「どうして！？どうしてこんな事になっているの！？」

アル「そんなの…分かる訳ねえだろ！」

動揺するジュード、珍しく怒ったような声を上げるアルヴィン

エリーゼ「お願い…：リオ…：いなくならないで！」

ティポ「死んじゃやだよー！いなくなっちゃダメー！」

エリーゼは泣きながら、必死に治癒術をかけていた、ティポも悲し
そうに叫んでいた

すると…

「いたぞ！脱走者はこっちだ！」

兵士達がリオ達を見つけ、集まり始めていた

アル「ともかく、これ以上は無理だ。カラハ・シャルルに戻ろうぜ」

一生懸命にリオの傷を治療するジュードとエリーゼも一旦、その手

を止める

だが

「逃がすな！ゴーレムを起動させる！」

それを見たローエンが、急いで確保してあった馬車を動かす

ローエン「時間がありません、急いでください！」

アルヴィンがリオを抱え、全員が急いで馬車に飛び乗った

ゴーレムが起動し、動き始めたが、間一髪の所でガンダラ要塞から脱出することができ、そのままカラハ・シャルルへと戻っていった

14 (後書き)

今回はここまでです

これで、ガンダラ要塞編は終了です

ナハティガルに言ったりオの言葉ですが、砂漠の国の王の言葉を参考にしました。まあ、誰かはわかると思いますが…

シャルル家屋敷

リオ「ん……あれ、ここ……は……」

リオは痛みを感じながらもベッドから体を起こした

リオ「（この部屋は……シャルル家の屋敷ですか。あの後ここに運んでもらったみたいですね）」

リオが今の状況を確認していると

ガチャ

ミラ「リオ？……リオ！気がついたか！」

ミラが部屋に入ってきて、リオが起きているのを見ると駆け寄ってきた

ミラ「よかった……3日も意識が戻らなかったから、本当に心配したんだぞ」

リオ「そうでしたか……すみません、もう大丈夫ですよ。ミラさん達は大丈夫でしたか？」

ミラ「ああ、全員無事に脱出できた」

リオ「それならよかったです」

ミラ「それよりも、だ…何故身代わりなんて事をしたんだ。本来なら私がその位置だったのだぞ？」

リオ「だからですよ。それに、私は自らの誓いのまま行動しただけです。気に病む必要はありません…あの時も言いましたが、友達を助けるのは当然ですよ」

ミラ「しかし」

ミラとリオが話していると

ガチャ

ドロツセルが部屋に入ってきた

ドロツセル「リオ！よかった、目が覚めたのね！今、先生とお兄様を呼んでくるから待っててね」

そういい、急いで部屋を出ていった

「はい、結構ですよ。熱も下がりましたし、もう大丈夫でしょう」

先生はリオの診察をして、そう言い部屋を出ていった

先生が出て行ってからすぐに、クレインとローエンが部屋に入ってきた

クレイン「気がつかれてよかった、心配しましたよ。お礼も言えずに別れるのは嫌ですからね、リオさんのおかげで助かりました。ありがとうございます」

ローエン「私からもお礼を言わせてください、旦那様を助けていただき有り難うございます」

リオ「いえ、無事でよかったです。皆さんが悲しむ姿は見たくありませんから……そういえば、他の人たちはどうしたのですか？」

ローエン「エリーゼさんとティポさんは下にいますよ。ジュードさんはアルヴィンさんを追って外へ行かれました」

みんなで楽しく話していると

くううううう…

どこからかお腹のなく音が聞こえてきた

リオ「……………」

みんな「……………」

全員が聞こえた方向　つまり、リオの方を見る

リオ「……………あう／／／／／」

リオはあまりの恥ずかしさに、顔を真っ赤にして俯いてしまった

全員「(何でしょう)(だろう)(か、この可愛い生き物は……)」

クレイン「そ、それでは、リオさんも目覚めたことだし、食事にようか」

ミラ「そ、そうだな、そうするとしよう」

ローエン「では、準備して参ります」

ドロツセル「ほら、リオ。早く行きましょう？」

リオ「……………」

ミラ「……？リオ、どうかしたのか？」

リオ「……足が、動かないんですよ」

ピキッ

全員の動きが止まり、空気が固まった

ミラ「な、なんだと!？」

ドロツセル「わ、私、先生を呼んでくるわ!」

ドロツセルは先生を呼びに部屋を飛び出していった

ローエン「…本当なのですか？」

リオ「ええ。痛みも感覚もありません」

そう話していると、ドロツセルが先生とエリーゼ、ティポと共に部屋に入ってきた

診察、及び状況説明中

「恐らく、下半身に何度も爆発を受けた事、その状態でかなり無理をしたことが原因でしょう」

エリー「リオは…歩けるようになるの…?」
不安一杯な顔でエリーゼは先生にたずねる

「…残念ですが、それは難しいでしょう。再び歩けるようになって人を私は知りません」

ミラ「…私の所為だな…。あの時、やはり私が戦っていればこんな事にはならなかった」

ミラは自分の不甲斐なさに拳を握りしめ俯く

リオ「…はあ。ミラさん、私、言いましたよね？私は自分の誓いに従って行動したことに後悔はありません。友達を守るのは当然の事。だからミラさんが気に病む必要はない、と」

ミラ「……」

リオ「それに、私が行かなければ今頃はミラさんがこうなっていた
のでしょうか？なら、そのほうが後悔しますよ。自らの誓いを果たせ
なかった、と」

リオの言葉に全員が黙ってしまった。リオの表情には失敗や後悔と
いったものが、微塵も浮かんでいなかったから…
すると、気になっていたのか、ドロツセルが口を開いた

ドロツセル「あの…リオの誓いつて何か聞いてもいいかしら？」

エリー「わ、わたしも聞いてみたい…です」

ティポ「ボクも知りたいー」

ローエン「私も少々気になりますね。ミラさんはご存知なのでしょう
う？」

ミラ「あ、ああ…」

若干困った様子のミラに、リオは仕方なく口を開いた

リオ「…仕方ありませんね、誓いとはあまり人に話すものではない
のですが…【友達と家族を守る、二度と傷つけさせはしない】こ
れだけです。」

この誓いを守るなら私は傷つくことは構わないし何だってします」

リオの決意の重さに再び黙ってしまった…軽い気持ちで誓いを聞い
てしまったことに後悔しながら

すると

エリー「でも…それでリオが傷つくのは嫌です！」

ローエン「そうですね。いくら私達の為とはいえ、それでリオさんが傷ついてしまえば後悔するのは私達なのですから」

ミラ「（私の考えと全く同じか…大切な者の口から聞くと、こうも嫌な気分になるとは…ふふ、考えを改めなければならぬな）…ならば、私達で守ればいい。二度とリオが傷つかないように」

エリー「ミラ…」

リオ「ミラさん…」

ローエン「ミラさん…」

ミラ「いくら後悔しても足りない。結果として私の代わりにリオが傷ついた事には変わりないのだから…ならば次に後悔するのはリオを守れなかった時だ。リオが私達を守るというのなら、私達でリオを守ればいい」

リオ「ですが、それでは」

ミラ「それに、友を守るのは当然なのだろう？ならば問題はないはずだ」

リオ「う…、……ミラさん卑怯です。そう言われると何も言えないじゃありませんか」

ミラ「ふふ、すまないな。だが、こう言えばリオも認めるしかないだろう？」

リオ「…わかりました。もう無茶なことはしませんよ、私の所為で

皆さんが傷つくのは嫌ですから」

リオの言葉に皆が笑顔になる。すると

くうううう…

またお腹の音が聞こえてきた

みんな「……………」

リオ「……………／／／／／」

ドロツセル「ふふ、さあ食事にしましょっ？」

ローエン「では、すぐに準備いたします」

ミラ「リオは私が連れていこう」

エリー「あー、ミラずるいです」

ティポ「ボクもリオ君と一緒に行くー」

全員で一緒にエントランスに戻ると、すでにジュードとアルヴィンもおり、リオの状態に驚いていたがリオの言葉に渋々ながら納得したので、一緒に食事をとった

食事が終わり、ミラ達はこれからのことを話し合っていた

アル「で？これからどうするよ」

ミラ「ナハティガルは討たねばならない。だが、リオをこのままにしておく訳にもいかないだろう」

リオ「私のことは気にしないで下さい。ミラさんには使命があるのでしょうか？なら、それを果たすべきです」

ローエン「リオさんのことはお任せ下さい。旦那様もお嬢様も歓迎すると申しております」

ミラ「いや、しかし…」

話がなかなか進まない中、ジュードが道を示した

ジュード「リオの足のことなただけどさ、治せるかもしれない」

ミラ「なに！？本当か!？」

ジュード「うん。そのためにはル・ロンドへ行く必要があるけど…」

僕の父さんがさ、昔足の不自由な人を治療したことがあるんだ」

ミラ「ならば次に行くところは決まったな。リオの足を治す。リオもそれでいいな？」

リオ「私は構いませんが、使命があるのでは？」

ミラ「使命も大事だが、リオも同じくらい大事だからな。治せる可能性があるので、そちらへ向かうべきだ」

聞けば誰もが恥ずかしくなるような台詞を堂々というミラ。言われ

たリオは…当然?のように真っ赤になっていた

リオ「あ、ありがとう…ごじます／＼／＼」

嬉しそうに、恥ずかしそうに照れているリオ

その姿を見て、抱きしめたい衝動に駆られながらも何とか耐えているドロツセルとエリーゼ

一方、初めてリオのそんな姿を見て驚いているアルヴィン、ローエン、ジュードの3人…1人顔が赤くなっているが…

アル「悪いが、俺は別の仕事があるんでね。一緒に行けないのは残念だが今回はパスだ」

ローエン「私も旦那様とお嬢様を残していく訳には参りませんので、申し訳ありませんが…」

エリー「わ、わたしは…一緒に行きたい…です」

ジュード「駄目だよ、エリーゼはここに残るんだ」

エリー「えっ…どうして…ですか?」

ティポ「置いていくななんてひどいよー」

ジュード「元々エリーゼを受け入れてくれる人を探していたんだし、ドロツセルさん達と一緒になら寂しくないでしょ?」

エリー「……」

ミラ「…決まったようだな。すまないが、馬を一頭貸してもらえないか？ル・ Rond まで私達に運ばれるのはリオも辛いだろう」

クレイン「もちろんです、すぐに用意させましょう。…ローエン、すまないが頼めるか？」

ローエン「承知いたしました」

リオ「ありがとうございます。クレインさん」

クレイン「いえ、リオさんは命の恩人です。この位のことでは恩返しにもなりません。それに、私達もリオさんの力になりたいと思っていますから」

こうして、馬が用意できる明日までシャール家に泊めてもらうことにした

15 (後書き)

更新が遅くなってしまいました。今回はここまでです

リオの足についてですが、途中で気を失ったので自動治癒が効かずに神経にダメージが残ったまま…ということにしておいて下さい

リオの表情がだいぶ豊かになってきました。全ての感情を取り戻す日も近い…かも？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1850x/>

テイルズオブエクシリア～心をなくした少女～

2011年10月26日10時10分発行